

園だより

第 9 号

2018年11月30日



虫との関わり

園長 馬見 雅子

気温が下がり、トンボの姿が見えなくなる頃、山の虫たちの姿は見られなくなります。そして雪が降りました。今はたまにカメムシの姿を見かけるぐらいでしょうか。虫網や虫かごは、ソリに代わり遊具庫で冬休み。小さな虫捕り探検隊たちは、これから冬の遊びを楽しむ季節になりました。

春にワラジムシを見つけ歓声を挙げた子どもたちは、ダンゴムシ・アリ・チョウ・セミ・バッタ・クワガタ・トンボ等、たくさん虫たちと触れ合ってきました。虫網片手に虫を探し、見つけることができ、そして捕まえることのできた達成感は大きな喜びです。そしてその姿・色・変態の不思議さに見入り、虫メガネや図鑑で好奇心と知識への欲求を膨らませました。10月には、北海道では見かけることのないカマキリをいただき、その飼育ケースの周りはいつも人だかり。子どもばかりか教師も一緒になってその姿に見入り、餌集めに奔走しました。生きた虫しか食べないカマキリの食事風景を目の当たりにし、自然の現実や厳しさを子どもなりに感じ取った子どもいたかもしれません。



～虫探し探検隊～

こんな姿も目にしました。先日の外遊びの光景です。砂利のところでもまごと遊びをしていた年長の女兒2人。砂利をスコップで拾ってはフライパンに入れていた時「あ、虫だ。ここの石は戻してあげよう。他の所の取ろう！」という声が聞こえてきました。また別の日には、年少の女兒が、もう乾いてしまったミミズ（虫ではありませんが）を落ち葉2枚ではさみ、「お布団で寝ているの。」「元気がないからお水をかけてあげたいの。」と書いてきました。一緒に少しだけお水をかけてあげ、その後しばらく大事に連れ歩き、木の近くにそっと置いていました。そんな光景に心の成長を感じました。



～かまきりを覗き込む～

園では身近に虫たちがいます。虫が好きな子、さほど好きでない子にとっても馴染みのある身近な存在、命なのだと感じます。虫を夢中になって追いかける子の姿から、**その魅力が周りの子にも広がります。知っていることを教え合い共有し、友達の関わりにも広がりが見られます。好奇心を広げ、その子の知識やイメージが広がることもあるでしょう。**アリを踏みつけてしまい、周りの大人や友達に諭され、**命の重みに気付く機会があるかもしれません。**虫たちは、その小さな命で子どもたちに多くのことを与え、教えてくれています。

いよいよ、雪の便りも聞かれ、雪遊びの季節になりました。来年の春、虫たちとの出会いを喜び子どもたちの歓声を楽しみにしています。

山の子まつりパートⅡでの子どもの成長

日誌 貴之

10月、例年行ってきた山の子まつりパートⅡを振り返りながら、良いところや課題、子どもたちの何を育てたいのか等、その意義について教師間で話し合いました。それは保育の一環であるという位置づけでありながらも大きな行事を行う時のようにとても大切な時間でした。

『子どもたち主体に進め、やりたいことを実現するために子ども自身が考え取り組んでいく』言葉にしてしまうと高いハードルであります。緑組、青組が一緒になり少人数で子ども同士話し合いをする時間を持ったり、クラス全体の中で意見を出してくれた子から刺激をもらえるように発表したりすることから進めてきました。それぞれ得意な知識で意見を言える子、まだ恥ずかしくて自分の思いを伝えられない子、友だちからの意見でひらめき、気づき、応用を思いつく子など様々な姿が見られ、「こんなことを言えるようになったのか」と発見することもあり、やはりそこには年長の力が必要であると実感しました。なかなか進まない会議の中、今までになく積極的に取り組む姿が見られ、緑組の意見も実現できるように考えてくれて年長らしい姿に感心することもありました。

活動を進める中では自分の思いを通そうとぶつかることもありましたが、相手にも思いがあることを知り、ぐっところえて「じゃあ、こうしたらどうかな？」と寄り添えるようになってきたり、製作の場面では出来るようになった子が自分から他の子に教えてあげたりと日々の保育の中で変化がみられてきました。そして、家に帰ってから明日のことを考え、設計図を描いて持って来たり、材料はないかと色々探して来たりと青組ばかりではなく緑組の子も刺激を受け自分たちで作り上げる楽しさを感じている子がたくさんいることにうれしくなりました。

一つひとつ、形となっていくお店に目を輝かせながら楽しみにしていた子どもたちは、全力でお店屋さんになりきり、会議の時よりも大きな声で「いらっしゃいませ！」と声を出せるようになっていて、誇らしげな姿。そして、「〇〇屋さんに僕がいるから買いに来てね」と当日お買い物をする仲良しの赤組に対して思いを伝え、会いに来てくれたことに喜び優しく関わる姿も見られました。

教師の傍から離れ、自分で幼稚園中を買い物しながら歩き回り、自分からお店のお兄さんお姉さんに声を掛ける赤組にも大きな成長を感じました。赤組の子どもたちの心にも思い出が大切に残りきって来年以降の力となったことでしょう。

共通の思いで取り組んだこのパートⅡは教師が描いた以上に子どもたちが自信をつけ、輝いた姿を見せてくれたものになりました。